

たみくさ 二等伶人 東儀季芳撰

たみくさの さかゆると きと
 なわしろに みずせき いれて
 みしめなわ ゆたに ひきはえ
 やつかほの たりほの い
 ねの としあらむ こころ
 たの のみと い
 まあろす
 なり

(巻越調律旋)

八十年まえの
幼稚園音楽

山中二郎

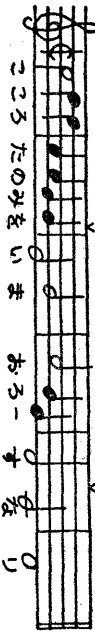
これが、我国最初の幼稚園唱歌の中の一曲です。御覧の通り、むつかしい文語体の歌詞に、雅楽律旋法の、いとも悠長閑雅な曲のついたもので、今日の常識から見たら、これが幼児の音楽とは、とても思えない別世界の（雲の上の）音楽であります。

その昔、幼稚園というものが、はじめて出来、さて、幼児たちにも、何か歌など歌わせたいと思ったが、材料は皆目ない。当時、音楽といったら、三味線を中心とした花柳界の音楽か、極、一部の家庭で行われた、お琴の音楽か、又、これらの俗楽を外にしては、今度は一思いに、雲の上までとんで、宮廷の儀式に使われた、宮内省の雅楽しかなかったわけです。

幼児には、是非とも歌わせたいが、さて、どこにその資料を求めるかについての、当時、関係者の苦心の程は、まことに想像以上のものがあつたらう、と思われるのであります。そこで思案の末、雅楽で行こうという基本線をきめて、今、お茶の水女子大学附属幼稚園の前身、東京女子師範学校幼稚園で、歌詞を撰んで、作曲は、宮内省の伶人（楽士）たちに依頼した。かくて、出来上ったものが、『東京女子師範学校幼稚園保育唱歌』であります。当時、同幼稚園には全国の模範幼稚園から、先生方が、今でいう現職教育のために集まっており、それらの人の筆写（毛筆の）によって、保育唱歌は全国に普及していったわけであり、『たみくさ』も、その中の一曲であります。

但し、当時は、まだ五線の楽譜はなく、カナタテ書きの歌詞の左横に、大陸伝来の、漢字による階名がついており、こまかいうたいまわしは、今日謡曲などの楽譜に見る、線や点や丸や、折釘のようなシルシによって、示されております。

今度、幼稚園の80周年の記念行事のために、これら、一番古い時代の、歌の出演を、大阪方が引きうけたので、その必要から、古い資料をしらべ、雅楽の専門家の門を叩いて教えをうけ、色々と研究したので、当時幼稚園に在学し、今日健在な方々の記憶によると、たみくさの最後の部分、牛のよだれのように、のびのびするところは、次に示す楽譜のように、簡約して教えられたものようであります。



つまり、当時の幼稚園の先生方は、あまりにも幼児むきでない歌の一部分を、改作して子供たちに与えようという、見識と実力と、心意気を持っておられたように、見うけられます。

保、育、唱、歌は、一冊としては刊行されず、新曲の出る度に希望者が筆写して、その数は十数曲あるようですが、そのうち、たみくさと家鳩とは、特に愛唱されたものようで、愛珠幼稚園所蔵の資料を見ると、この二曲のところだけ、手垢がつき、紙がくたびれ、他の数多くの曲のところは、紙も真新しく、殆ど使われていないように

見えます。実際には相当曲数が作られていながら、歌われたものは案外少かったのではないかと思われるフシがあります。尤も愛珠幼稚園では、たみくさに別の歌詞をあてて、校歌がわりに当時愛唱したと、記録に見えております。

× × ×

我国学校唱歌（幼稚園を含む）は、明治十六年を軸として、まことに目覚ましい転回をとげました。

この年の七月に、文部省から、小学唱歌と共に出版された、幼稚園唱歌は、全く百八十度、ものみごとに転回し、完全な脱皮をとげております。

この本の中には、今日なお愛唱されている蝶々はじめ、全巻二十九曲のうち、日本音階のもの僅かに二曲、他の二十七曲は空に、一足とびに、西洋の長音階（現行教材と同じもの）によるものです。日本音階の二曲でさえ、風車は、その結びが律旋法風ではあるけれども、途中は殆ど長音階の匂いが強く、他の一曲は、数えうたで、琴うたの音階（俗楽陰旋法）であります。

内容がそんなに急変したばかりでなく、その本は、紙、和綴、木版刷りの和本ながら、各一曲毎に、今日同様の、横書歌詞をつけた立派な五線譜が鮮明に印刷されてあります。

それでは、その本の刊行を境にして、日本国中の幼児達は、直ちに、身近な愛唱歌を沢山、持つことが出来たかというところ、それは、

左様カンタンには参らず、五線譜にかかれた、近代的な長音階の歌曲ではありながら、実際、幼児の愛唱にたえるものは、僅々二三曲にすぎず、他は何れも、その程度が高すぎて、実用に適しかねたようであります。

例えば、例を音域にとつてみても、今日、文部省から出ている幼稚園のための指導書によれば、幼児の歌の音域は C_4 が理想的だと書かれてあります。しかし実際問題として、この六度だけでは、どんな勝れた作曲家でも、楽しい美しい歌を作りかねるので、今日幼児の歌の音域は C_4 が常識となっております。ところが明治十六年の本には、実に C_4 の二点の方が、しかも強く長く延して歌う個所にさえ、しばしば現われ、これを十分に歌うことは、小、中学生はおろか、高校生でもむつかしかろうという——まあ、そういう具合です。

その他、拍子も、六拍子のむつかしいものが、相当数あり、曲趣の如きも一般に高級で、中には途中から段階的に、長調——短調——長調、と行つたり来たり転調するという、念入りな高級品までである始末です。

ここで面白いのは、その本の緒言に、調子や拍子についてうたつてあることばです。それは、今日でも生きている、立派な、音楽教育上の見識ですが、さて実際の曲とのチグハグが、どうしたことかと思われるのです。幼稚園の唱歌は、特に拍子と調子とに注意しな

ければならない、として次のように書いてあります。

——拍子の(テムボの意味?)緩徐に失する時は、汗発爽快の精神を損し、調子の高低、その度を失する時は、ただに音声の発達を阻害するのみならず、幼児の性情に嫌悪を生じ、その開暢を妨ぐるおそれあり、云云……

× × × ×

此度の記念式には、雅楽、時代の代表として、家鳩・民草、又、幼稚園唱歌からは、その少い幼児向きものとして、蝶々、風車、たまきの三曲を演奏したわけですが、これらの曲は何れも、主催側の及川先生の方から、指定して来られたものですが、その後幼稚園唱歌、全巻をくわしく調べてみると、この本もやはり、当時、二十九曲を取めて堂々と刊行されたにもかかわらず、実際には前記の数曲しか、行なわれなかったのではないかと思われるのです。

× × × ×

記念式の行事には、以上数曲に、ふりつけられた動作も実演したわけですが、序ながら、それらの遊戯について、カンタンにのべてみたいと思います。

(1) たみくさ……稲穂のなびくさま、苗代に水をひき入れる、その水の流れの形などを、両手を左右になびかせて、動作しただけで、あまり興味なく、はつきりした記憶がない、と故老もいわれ、愛珠の資料にも、この曲の遊戯図はありません。

(2) 家はと……は、初め円陣。そのうちの数名は、前もつて鳩になる約束あり、『巢の戸開きて放ちやる……で鳩の子が、一斉に円陣内にとび出し、自由にはばたき、とびまわる。そのうち歌が進行して『かえらば巢の戸閉じてん』と、うたい乍ら円陣をひきしめて行く。ところが、広い山野に遊びほほけて、門限におくれ、閉め出しにあう鳩の子もあつたという。二三回くりかえし、順次鳩のなりてを交代していく。

(3) 風ぐるま……一回円陣をつくり、両腕をからだの前方にかまえ、歌につれて、かいぐりかいかいぐりの回転を次第に早め、やがて又漸次ゆるめて、静止する。手を回転させる位置は、高い者あり、低いものあり、見た目に変化あるようにする。題は風車だが、二番歌詞は水車をうたっており、手のまわし方は、今度は反対に外まわりにする。

(4) たまき……『めぐれどはしなし、たまきの如くに……(廻つてもはてしが無い、渦巻のように、ぐるりぐると、意)初め円陣。先頭の子が、独楽の、しんぼうのように、人さし指を、眉間の前上に立てて、円が次第に渦巻となるように、内側へ内側へと進む。一応渦巻の形が出来たら、歌のくりかえしにつれて、今度は、もとの円陣にかえる方向に進んで行く。この際、先頭の子が、余程たくみに誘導しないと、渦巻どころか、線が、もつれて收拾がつかなくなる。それで先頭には、多くの場合、先生が立たれる由。

(5) 蝶々……両手を交叉して胸を抱く形。その両手の拇指を、からみあわせて、胸から少しひき離すと、触角のある可愛い蝶々。それが両手の翅を、ひらひらさせてとびまわる(両腕を体側でバツつかせる身体一杯の蝶と違ってマコトに可憐)こうした蝶が数人で、あとは花。静止。菜の花は、両手の二三指を立てたものを、そのままくっつけて四弁の花。桜の花は、両手の指を全部半開きにひろげ、手の甲をあわせて両手を交叉し、八重の桜をあらわす。

蝶は菜の花と桜の間を、自由にとびまわり、『とまれよあそべ、あそべよとまれ』で、任意の花に翅を休める。蝶にとまってもらった花は、次に蝶となるきまり。蝶になって、とびあるきたさに、皆、蝶にむかい『とまつてとまつて』と、せがんだ由。

× × ×

以上の動作は、愛珠幼稚園にある写真、絵画により、又、中村同園長が、自分の記憶をよび起し、所在の古い人達の許を訪ね回って調べ、出演に際しては、同園長が中心となって指導したもの。

動作の方は、楽譜のようにはつきりした記録が少いので、人によって記憶もまちまちであるが、子供との実際の練習の上から、自信をもって、自分の創意を添加した形跡があります。歌曲にせよ、その振付にせよ、実際に、今、目の前に生きて動いている可愛い者達に、よりよく適合させるために、研究、創意、工夫、改編を敢てした当時の指導者の、心意気に敬意を表して、筆をおきます。